

不登校経験を持つ若者たちの もう一つのキャリアパス

北村真也



第1章 キャリアって何？

2. 若者たちのキャリアプラン

3年間のひきこもり生活から脱出した若者がいました。ほんの2年前まで毎日死ぬことしか考えていなかったという彼は、高校課程の学び直しということを通して、失いかけていた自分自身を再び取り戻し始めました。そして、知誠館の体験活動で毎年お世話になっている製菓教室の先生との出会いを通して、次第に自分もパティシエになることを決意するようになっていったのです。やがて彼は、昼間はホテルの製菓部で働きながら夜間に製菓専門学校へ通うという進路を選択しました。専門学校の学費も早朝からスーパーで働き、自分で工面していったといいます。わずか2年間という時間軸の中で、毎日死ぬことしか考えなかった彼の内面に生じた変化が、将来への可能性を一変させたのです。

また知誠館に通う生徒の中には、複数の学校を途中でやめた若者も少なくありません。ある生徒は、対人関係の緊張から教室に入れず、中学校は不登校、高校は2校を中途退学し、自宅のトイレにひきこもって自分の髪の毛を大量に抜くという行為を繰り返していました。そんな彼女も今年で知

誠館を卒業し、管理栄養士をめざしていきます。20歳になった彼女は、車の免許を取得し毎日休まず知誠館に通っているのです。あの毎日暗い顔をして蚊のなくような声でしか話せなかった彼女は、もうどこにもいなくなりました。

「2年前の私に言ってやりたい。“あなたの2年後はこんな風になってるんやから、何をくよくよしてるんや”ってね」

そう笑顔で話す彼女の表情に、もはや昔の面影はありませんでした。

入口と出口。知誠館にやってきた若者と巣立っていく若者は、同じ人物とは思えないほどの違いがあります。そこが若者たちの変容の可能性なのです。だから若者たちのキャリア支援を考える時、そこに変容ののびしろを見ておくことはとても大切なことだと思います。毎日死ぬことばかり考えていた若者のキャリアプランと、パティシエになることを心から望んでいる若者のキャリアプランは、全く別人のようなものになっていくからです。それは、「2年前の自分に言ってやりたい」と言っていたあの対人不安に苦しんでいた女の子や、不登校になることで自分の絵の才能を開花させてい

った女の子にもよく当てはまることなのです。

「キャリアプラン」という概念に「変容」という概念を重ねる時、そこに「学び」の概念が浮かび上がってきます。学びというものは、本来自分のキャリアへの可能性を拓くものです。知誠館に学ぶ若者たちは、ここで能動的な学びの世界を手に入れることで、自らのキャリア形成の方法を手に入れているのかもしれませんが。繰り返しになりますが、若者たちのキャリア支援の現場を考える時、目の前にいる現時点での若者の姿を想定して描くキャリアプランに果たしてどの程度の意味があるのかということを、一方では考えないといけないように思います。彼らの変容の可能性を絶えず考慮しながら、そのキャリアプランそのものも更新されるべきではないかと思うのです。固定されたキャリアプランに当事者たちの現状を当てはめていくのではなく、本人の変容に応じて自己更新できるような腰を据えたキャリアプランの構築が必要になってくると思うのです。



3. 誰のための支援なの？

大学在学中の就職活動でうまく企業の内定をもらえなかったアキラは、卒業と同時に市が主催する就労支援プログラムに参加していました。そしてプログラム終了後、どこにも就職することなく、大学院へと進学していったのです。そんなアキラは自分が受けてきた就労支援プログラムをこんな風に振り返ります。

「僕は半年間、このプログラムに参加しました。履歴書の書き方から、挨拶のしかた、面接のしかた、自己アピールのしかたと、次から次へといろいろなプログラムがあったんですけど、最終的には、とりあえずどこかへ就職してください的な、そんなプレッシャーがあるんですね。とにかくどこかへ、どこでもいいし落ち着かせたいという意志が前面にでてくるんです。それがしんどくて、僕は最終的にはどこにも就職しなかったんですよ…」

研修を終えたアキラにとって、この研修はいったい誰のものだったのかということが、大きな問いとして残ったそうです。みんな言われるままに、次から次へといろいろなプログラムに参加したそうですが、最後の方になってくると「どうして就職しようとしないのか？」という問いかけばかりで、就職への強いプレッシャーを感じたといいます。

このことを裏付ける話は、厚生労働省の委託事業である若者就労サポートセンターを運営する NPO 団体の関係者からも聞いたことがありました。そこには、行政による評価（アセスメント）の問題が存在しま

す。それによると半年間でこの NPO 自体がどの程度成果を出したかを相談者の就労数の実績で評価されるということです。そしてそれが、翌年の助成を受ける際の審査の判断材料となるため、みんな一生懸命になって若者たちを就労させようとするのです。ただここで問題になるのは、そのことが必ず当事者である若者たちの意にかなうものとは限らなくなってしまうということです。例えば他の就労支援プログラムに参加しても評価のポイントになるし、高校中退者であればとりあえずどこかの通信制高校へ入学させる、これもまた実績としてカウントされていくそうです。つまり支援側は、当事者の意向よりも、評価のポイントになるキャリアを優先させてしまう危険性が出てしまうということになりかねないのです。

またこんな話も聞いたことがあります。このような評価の仕組みがあるため、NPO には、すぐに就労できる可能性を持った比較的問題の程度が軽い若者たちにきてほしいという意識が生まれてしまいます。このことは、逆に本当に支援が必要で、就労までに長い時間がかかりそうな若者たちが敬遠される危険性を含んでしまうということでもあるのです。そうすると今度は、いったい誰のための支援かということがわからなくなります。つまり当事者である若者たちのための支援なのか、あるいは、その NPO で働く人たちのための支援なのかという境界があいまいになってしまうのです。ある NPO の関係者は、NPO で働く職員には元当事者の若者たちも多くいるため、組織そのものが就労支援の受け皿になっているという事実をあげてこのことの正当性を

主張するのですが、それではこの事業の本来の目的が曖昧になってしまうように思えます。

評価というものは怖いもので、こんな風に事業そのものの意味を喪失させてしまうような危険性を含んでしまいます。これは資金的な権限を行政が握っているため、ある意味で社会のパターナリズムが機能してしまっているケースともいえます。つまり社会そのものが NPO を管理し、その NPO が当事者たちを管理するという構造です。これでは、個人が社会に影響を与え、社会を動かしていくという相補的なダイナミズムが一向に生じないため、自動的に社会のパターナリズムが強化されてしまいます。大きな社会の力の中では、常に個人から社会と向かうベクトルを意識しないと、気がつけば個人、特に社会的弱者と呼ばれるような人たちが取り残されてしまうように思うのです。

ポスト近代は、家族や地域といった小さな社会が失われ、また、社会的なつながりが脆弱化し不安定になっていくイメージを持っています。言い換えるとそれは、社会の中にある空間と文化が一致できずに断片化されていく状況を作り出していると表現できるかもしれません。アンソニー・ギデンズが再帰的社会と呼んでいるように、社会への問いそのものが社会へと再帰していくので、その答えが大変不確実なものとなっていくのです。だからさまざまなものが予定調和に運ばなくなっていく危険性が高くなってしまいます。

答えがない時代、その言い方は正確ではないかもしれませんが、その時々への答えは存在するかもしれませんが、それが一定である保証がない時代、と言えるでしょうか。そんな時代だからこそ、若者たちが自分でそのキャリアを更新していけるような生き方が求められているように思うのです。定型的な与えられたキャリアを生きるのではなく、自分で自分の人生の文脈を描いていくようなキャリア形成が必要となっているのではないのでしょうか。

